

バルザック『谷間の百合』覚書

西 節 夫

一八三四年十一月十五日号の「両世界評論」誌 (Revue des Deux Mondes) に、サント＝ブーヴによる『絶対の探求』(La Recherche de l'Absolu) 評が掲載されたが、それは「現代の錬金術士」Ci.: (実はシリヤニ某 Cyliani) の告白録である『あばかれたヘルメス』(Hermès dévoilé) が、バルザックの作品の秘せられた source ではないかと読者に思わせかねない、きわめて意地の悪いものであった。ジュール・サンドーの証言によれば、この批評文に激怒したバルザックが、「復讐してやる。『愛欲』(Volupté) を書き直してみせる」と叫んだという話が、当の批評家自身によって記されている。⁽¹⁾

バルザックが、サント＝ブーヴの『愛欲』をいわば下敷きにして『谷間の百合』(Les Lys dans la vallée. 一八三六年六月刊行) を書いたであろうことは、大筋の類似と細部における若干の符合からしても否定できないが、彼は問題の批評文に接するより前に、『愛欲』の刊行された翌月である一八三四年八月二十五日付のハンスカ夫人宛の手紙において、早くもこの批評家の小説に言及して、「残念ながら、この本には、フランスにおける情熱の特徴を示すあの扇情的なふざけた行為、奔放さ、無分別なところがありません。これは un livre puritain です。クーン夫人は十分に女性ではなく、危険な情熱は存在しないのです」と断ずる一方において、「この本には深く考えさせられました。女性というものは男と決闘をするのです。そして、勝利を得ない場合には死ぬのです。生き方が正しくなければ死ぬのです。幸せになれなければ死ぬのです。それはまったく恐ろしいことです」と述べている。⁽²⁾したがって、すでにこのときから、バルザックのうちに、『愛欲』を

フランス的な危険な情熱を描いた un livre catholique に書き直す意図が胚胎していたともいえるであろう。このように執筆の動機は外的なものであったにせよ、『谷間の百合』が、バルザックの数多い作品のなかでも、『ルイ・ランベール』(Louis Lambert)、『あざ皮』(La Peau de chagrin)と並び、特に自伝的な要素の濃い小説であることは周知のところである。フェリックス・ド・ヴァンドネスの少年時代はほとんどそのままバルザック自身のものであり、アンリエット・ド・モルソーフにはカストリ侯爵夫人、ギドボニ・ヴィスコンチ夫人、さらにはカロー夫人など、なんらかの意味で作者と親しかった複数の女性の投影が見られるとはいえ、その主要で決定的なモデルが、彼を人間的にも作家としても育てた最初の恋人ベルニー夫人であることに異論の余地はない。一八三五年はじめ、夫人はすでに死にいたる病の床にあったが、バルザックは彼女を、「十四年間私を見守ってくれた天使、かつて世間にけがされたことのない、私の星であった孤独の花」と形容している。⁽³⁾「星」といい「孤独の花」といい、ロマン主義文学時代の常套語であるとはいえ、フェリックスにとって天上の「星」の化身であり、「女性の花たる人」であり、谷間の孤高の白百合であるモルソーフ夫人と、なんと見事な符合であろう。そればかりでなく彼は、翌年ベルニー夫人の死に際して、モルソーフ夫人は彼女の「最もささやかな美点の色あせた表現」である⁽⁴⁾と、はっきり述べている。

だが、事実をいえば、モルソーフ夫人がフェリックスよりも六、七歳年長にすぎず、豊満で魅惑的な肉体と清らかな美貌に恵まれているのに対して、ベルニー夫人はバルザックより二十歳以上も年上であって、さして美貌でもなく、なによりも、モルソーフ夫人に影響をあたえる地上の生に対して否定的な神秘思想などとは無縁の、十八世紀風自由主義思想の持主であって、実生活でもかなり自由奔放であった。実際、青年バ

ルザックとの関係においても、モルソー夫人が「社会」を選んで「徳」に殉ずるのは対照的に、彼女は「自然」を選んで悔いるところがなかったのである。一八三二年六月、五十五歳の彼女はバルザックに対して、次のようにその決然たる「自然」主義を伝えている。

「自然も社会も、その掟に反する者を決して許してはくれません。私は必然的にそのどちらかにそむくよりほかなくて、後者を無視しなければならなかったのです。社会が私のために定めるところは存じています。でも、遠くに、栄光に包まれた立派なあなたの姿を見ることができれば……そうです、たとえ幸せでなくとも、私は満足でしょう。というのも、私があなを誇りに思っている限り、己が良心も世間も、私に對して何ひとつとがめ立てできなからうと思われるからです。」⁽⁵⁾

バルザックは生涯の恩人との愛の思い出を美化し、浄化し、崇高化して、モルソー夫人のうちに理想の母性を、あるいは永遠に女性的なものへの憧憬を具現するにいたったといえよう。と同時に、次のことを指摘しておかなければならない。バルザックとベルニー夫人は一八三二年以降友人の間柄に変わっていたが、バルザックの夫人に寄せる愛慕の念はむしろ昇華され高揚されたのであって、モルソー夫人像はその反映であり、また最大のあかしにほかならないことである。フェリックスはダッドレー夫人との情事について、「魂はあなたのもの、胸の思いも清らかな愛もあなたのものです。青春も老いの日々もあなたのものです。束の間の情熱の欲望と快樂だけが彼女のものなのです。あなたにはぼくの思い出のすべてが属し、彼女には

このうえなく深い忘却があるばかりです」とモルソーフ夫人に釈明するが、作者の分身的人物のこの言葉に、ベルニー夫人がバルザックにとってどれほど崇高で、無比で、永遠の存在になりおおせていたかを読みとることは容易であろう。ベルニー夫人はいうまでもなくそのことを知っていたのである。『谷間の百合』を読んだ彼女は、「私はもう死んでもかまいません。あなたは私がかねてから見たいと望んでいた冠を、まぢがいなく、頭にいただいでいるのですから。『百合』はけがれも欠点もない崇高な作品です」と称賛しながら、刊行の翌月には逝った。バルザックはすでに、ベルニー夫人との関係が友人の間柄に変わったその年のうちに、『ルイ・ランベール』の初版である『ルイ・ランベール略伝』(Notice biographique sur Louis Lambert. 一八三二年十月刊行)を、「今し、またとことわにわが愛する人に捧ぐ」Et nunc et semper dilectæ dicatum. という献辞とともに夫人に贈っていたが、彼女への愛の賛歌である『谷間の百合』は、こうして前以つての鎮魂の賦となつたのである。

フェリックスを中心に見た『谷間の百合』は、まさしくバルザックによる『感情教育』であつて、作者自らの青春を送る挽歌ともなつてゐる。モルソーフ夫人の死によつて、「青春の最も美しい感情と最も大きなドラマが終りを告げる」のを目の当たりにしたフェリックスは、次のように述懐する。「私たちほとんどすべての人間が、ちよつど私がトゥールからクロシユグールドに向かつたときのように、世界をわがものと思ひながら、しかも心は愛に飢えて、人生の朝ぼらけに出発するのです。そしてやがて、私たちの豊かな富が試験の坩堝るぼろを経てみると、つまり私たちが世間の人々や事件に立ちまじりはじめてみると、あらゆるものがいつとはなしに卑小化して、たくさんの灰のなかにほんの僅かな黄金を見出すばかりという仕儀にいたるの

です。これが人生なのです。これがあるがままの人生、すなわち抱負は大きく、現実はささやかな人生のありていなのです」と。⁽⁸⁾ 青年主人公のこの感慨の痛切さが、ベルニー夫人の死の間近なことを覚悟せざるを得なかった三十代半ばのバルザックの、その深い自省によって増幅されていることは否み難いのである。

二

『谷間の百合』に描かれているのは、心の結合だけで満足し得るプラトニックな恋ではもちろんなく、また、試煉のあとに完全な充足が期待される、中世騎士道風の恋愛とも似て非なるものであることはいうまでもない。それは、サント＝ブーヴの『愛欲』に対する作者の批判的な共感を、いわば忠実に反映した、きわめて官能的な男と女の戦いであり、そこにおける、とりわけモルソーフ夫人のうちにおける凄まじい靈肉相剋の姿である。「身をとりまくすべての生あるもの、すべての事物を通じて愛し合う」⁽⁹⁾「抑圧された情熱の美しさ」と凄絶さは、この小説を「ロワール河畔の城館から見た百日天下の歴史」『Histoire des Cent-Jours vue d'un château de La Loire』と要約したアランの有名な評言を、やはり主題をとらえきれない言葉に思わせるであろう。⁽¹⁰⁾

この靈肉相剋のドラマが頂点に達するのは、モルソーフ夫人が死を前にしたときである。やせおとろえた夫人は、フェリックスに向かって、狂おしい媚態を示しながら、「私は生きたいの。ダッドレー夫人のように馬にも乗りたいわ。パリも、楽しい宴も、いろんなよるこびも、何もかも知りたいわ」⁽¹¹⁾「嘘いつわりでな

く、本当の人生を生きるの。私の一生は嘘ばかりでしたもの。「……」まだ生きたこともない私が死ぬなんて、そんなことがあって？」「もうあなたを逃がさないわ。愛されたいの。ダッドレー夫人のようにどんな思い切ったことでもやるわ」と、生への執着と満たされなかった快樂への悔恨を、口走る。しかし、亜片の鎮静作用で錯乱状態から脱した彼女は、崇高で敬虔なカトリック教徒として臨終を迎えるのである。モルソーフ夫人のこの「肉の反抗の叫び」(今日見るのは、ベルニー夫人の忠告にしたがって、初版よりもおだやかに訂正されたものであるが)は同時代の識者たちのひんしゆくを買ったが、パルザックはそれについて次のように述べている。

「モルソーフ夫人の死の場面の美しさを理解しない無知な人々がいます。彼らはそこにキリスト教の基礎をなす物質と精神の戦いを見ようとはしません。彼らはただ欺かれた肉体、傷つけられた物質性の呪詛ばかりを見て、伯爵夫人が懺悔し聖女として死んでいくときの、彼女の魂の崇高なまでの平靜さを正当に評価しようとはしてくれないのです。」⁽¹⁴⁾

「カトリック教の制定したあらゆるものにおいて、人生の重大な争闘である肉体の精神に対する、物質の神的なものに対する戦いは是認されています。われわれの宗教にあっては、すべてが、われわれの来世のこの敵を粉碎することを目差しているのです。これこそはカトリック教会が旧来のあらゆる宗教と性格を異にするところです。「……」モルソーフ夫人は、そうした絶えざる争闘の表現にほかなりません。もし

も肉体がその最後の叫びを発しないとしたり、私は、カトリック教徒として真実であると同時に典型的な人物を描かなかったことになるでしょう。あなたは犠牲者が勝利を収めることに、彼女が死ぬのはその魂がこの最後の束縛から解き放たれたうえであることに、それにまた、あなたの言及している場面はそもそも病気のせいであることに気付いておられないのです。⁽¹⁵⁾

前者は一八三三年末から愛人関係に入っていたハンスカ夫人に訴えたものであり、後者は問題の場面を批判したジャーナリストのイポリット・カスチーユにあてた文章であるが、バルザックにしてみれば、この嘆きも反論も当然であつたに違いない。たしかにモルソー夫人は情念の「最後の束縛から解き放たれ」て、ルソーの『新エロイズ』(Julie ou Nouvelle Héloïse. 一七六一)における女性主人公の最後の日を思わせる、というよりも、その影響がはつきりと認められる「魂の崇高なまでの平静さ」のうちに死んでいくのである。そればかりではない。モルソー夫人の肉の叫びについても、神父によって、それは「この美しい魂を神と奪い合っている」悪魔のせいであつて彼女には責任のないこととされ、主治医はまたそれを、彼女がフェリックスとの思い出のために部屋を飾らせた秋の野の花束、すなわち豊饒で官能的な地上の愛の姿である花束と、その刺激的な香りがひき起こした錯乱としていたのであつて、⁽¹⁶⁾ un livre catholique を書こうとした作者の意図はいわばテクストに明らかだからである。

『谷間の百合』には、『新エロイズ』が大きな影を落としている。いやむしろそれは、書簡体という形式の点も含めて、後者をきわめて近い源流にしている作品である。そして、この愛のドラマを自己表白の小説とし

て、シャトーブリヤンの『ルネ』(René 一八〇二)からフロマンタンの『ドミニック』(Dominique 一八六三)にいたる系譜のなかに置くことも、文学史的常識であるといえよう。さらにまた『谷間の百合』に、審美的護教論であるシャトーブリヤンの『キリスト教精髓』(Le Génie du christianisme 一八〇二)の補遺的な意図と意義を認めるのも一般であるが、ジャン・エルヴェ・ドナルは、大きな心の迷いを経験しながらも、キリスト教徒として清らかに死んでいくモルソーフ夫人に、あるいは、禁じられた愛ゆえにクロシユグールドの聖女として昇天する彼女の運命に、ベルナノスやクロードルといった現代カトリック作家のテーマの先駆けを見ている。とりわけ、ドナルが示唆しているように、聖アウグスチヌスの「罪さえも」Eriam peccata の思想を中心にすえた、クロードルの『繻子の靴』(Le Soulier de Satin 一九二九)との比較研究は、『谷間の百合』解釈に新たな展望と深まりをもたらす試みになるであろうと思われる。⁽¹⁸⁾

三

『谷間の百合』は、バルザックの神秘主義的小説の頂点をなしている『セラフィタ』(Séraphita)と執筆の年代がほぼ等しいだけでなく、バルザックは一八三五年三月十一日付のハンスカ夫人宛の手紙で、その着想を伝えながら、「これはちょうど『セラフィタ』が天上の完成であるように、純粹に人間的な形での上に於ける完成になるでしょう」と述べている⁽¹⁹⁾。したがって、『セラフィタ』のきびしい靈肉分離の神秘主義が、『谷間の百合』にもあらわれているのはきわめて自然であって、そもそもモルソーフ夫人が、依然としてロ

「マ教会のうちにとどまっていたとはいえ、フェリックス・バルザックによって「来世をもつストア哲学」と要約されている、サン・マルタンの教義の信奉者であることを解く鍵もそこにある。『セラフィタ』とスウェーデンボルグとのつながりは周知であるが、この神秘小説の祈禱論とセラフィタの昇天にはサン・マルタンが深く影響しているからである。

しかし、一方において、作者の明白な護教的意図や、主旋律をなしている靈的なもの・天上的なものへの憧れにもかかわらず、『谷間の百合』が、さまざまの意味で、あいまいや *ambiguïté* を含んだ作品であることも否定できないであろう。⁽²¹⁾

モルソー夫人の「肉の反抗の叫び」の削除された部分には、次のような言葉が見出される。「あの人たちは天国の話聞かせるのよ！ いやよ、地獄でいいの、でも幸せが欲しいの！」⁽²²⁾「私が幸せになったとしても、誰か傷つく人があったかしら？ それなのにご覧なさい、私の不幸がどれだけのものを台無しにするか！ あなたがもっと聞き分けがよくなかったら、フェリックス、私は生きられたのよ。子供たちの幸せに気を配って、結婚もさせて、人生を導いてやれたのよ。なぜあなたは私を不意打ちなさらなかったの、夜に？……ああ、愛を知らずに死ぬなんて！ 喜びにあふれた愛、悦楽の極まりのうちに私たちの魂を天国まで連れていってくれる愛を知らずに死ぬなんて。なぜって、天国は私たちの方まで降りては来ませんもの。私たちの官能こそが私たちを天国に導いてくれるのですわ。私たちは半分しか愛し合わなかったのね。魂の結合って幸せな愛に先立つのではなくって、幸せな愛の結果なのよ。〔……〕それに私自身が思い違いをしたの。だって、私の犠牲は世間のためであって、神様のためじゃなかったのですもの！ それなのに、みん

なはあの世の話を聞かせて私を慰めるの。でもあの世なんてあつて?」さらに彼女は、気の毒な神父が「主よ、あわれみたまえ」と唱えるのを聞きつけると、笑い出しながら、「誰も私なんかをあわれんではくれなかつたわ! あなたはいつだって天国のお話ばかり! そこにこの人がいてくれるかしら、フェリックスが?」⁽²⁴⁾といて、フェリックスの首に腕をまわすのである。

これらの言葉は、ベルニー夫人の忠告にしたがつて削除されたとはいえ、モルソー夫人が彼女の人生を律してきた宗教的・道徳的な原理を、どれほどまでに懷疑するにいたったかを明かしていることに変わりはない。峻厳なカトリックの研究者であるフィリップ・ベルト師のように、この「肉の反抗の叫び」をおよそカトリック的でなく、しかも非現実的な設定とみなすか、⁽²⁵⁾あるいは作品中で最も感動的な場面と評価するかはいずれにもせよ、モルソー夫人の後悔はあまりにも明白であつて、これを瀕死の病人のうわごとと同化することは難しいであろう。加えて、フェリックスは次のような感懐を述べているのである。「死にいくものは誰もがこうなのだろうか? 彼らは一切の社会的な仮装を脱ぎ棄てて、まだそんなものを身にまといつていない子供たちのようになるのだろうか? それとも永生の岸辺に立つて、伯爵夫人はあらゆる人間的な感情のなかで、もはや恋しか認めず、その甘美な無垢の思いを、さながらクロエのように示そうとしてゐるのだろうか?」⁽²⁶⁾

そこで、フランソワ・ジェルマンはドナルとはまったく対照的に、「バルザックはそこに、むしろ本質的なものの遅すぎた発見を見ようとしている」のであり、この場面で「女性主人公を非難するどころか、要するに彼は、彼女の後悔によって彼女の天真爛漫さが証されることを望んでいる」⁽²⁷⁾のであつて、「モルソー

フ夫人の生き方は崇高ではあっても、結局のところ『百合』は、プラトニックな愛が灰の味わいを残すことを警告している」のだ、と見ている。たしかに、「社会」を選んで「徳」に殉ずるモルソー夫人の運命は、無視された「自然」肉体」によって彼女が復讐される姿にほかならないのであつて、疑いもなくそこには、物質性を無視することに対する作者の警告がこめられている。さらにまた、その警告が、実は靈性と官能とを峻別する宗教観の持主である新しい愛人、ハンスカ夫人へのメッセージとしての意味をもっていたことも明らかなのである。バルザックは、一八三六年十月一日付の手紙で、ハンスカ夫人にこう書き送っている。

「あなたが神秘家たちの著作を読んでおられることに、心を痛めております。どうか私のいうことをきいて下さい。そのような読書は、あなたのような魂にとっては致命的です。それは毒です。それは陶醉させる麻薬です。この種の本は悪影響を及ぼします。放埒の狂気沙汰があるように、美德の狂気沙汰というものもあるのです。」⁽²⁹⁾

とはいえ、『谷間の百合』の作者のそうした「自然」主義的な警告の意図を強調しすぎてはなるまい。そもそもバルザック自身が、崇高な狂気沙汰の魅力に、というよりも、その非凡であるがゆえに致命的な情熱そのものに憑かれていたからである。彼はフェリックスに次のように述べさせている。

「愛人の満たしてくれる愛には限度があります。物質とはもともと限りあるもので、その属性のもつ力も

あらかじめ計量でき、いつかは避け難い飽満状態にいきつくからです。「……」無限とは魂の領域であり、クロシユグールドにおける愛はまさに限りを知りませんでした。⁽³⁰⁾

先に見たモルソーフ夫人の言葉の削除された部分にも、その反映がうかがわれるように、靈性と肉体の分離ではなく、両者の同時高揚によって神的なものにいたり得るというのが、むしろパルザック本来の神秘主義的な考え方であって、また彼が、十八世紀的なイデオログとも神秘思想家たちとも違って、「魂の結合は肉体の結合を準備し、後者は前者を完成する」といった恋愛観を抱いていたこと(31)も、諸作品を通じて知られるのであるが、右のフェリックスの言葉にはそうしたオプチミストな、あるいは折衷的な思想を許さないきびしい響きを感じられるであろう。すなわち、無限の魂の結合に限りある肉体のそれが加わるならば、そのときから愛の永遠性は失われざるを得ないという、フェリックスもパルザックの一洞察がそこには示唆されている。『谷間の百合』を支配しているのは、いや、すくなくともモルソーフ夫人を捉えているのは、このストイックであると同時にペシミストな観念に相違ないのであって、もっぱら人間的な次元でいえば、彼女はそのためにも魂の結合に固執して、無限の愛に殉ずるのである。

四

モルソーフ夫人がフェリックスに遺した手紙のなかに、次のような告白が見出される。

「私があなたを愛しているのと同じくらい私もあなたに愛されており、私を裏切ったのは自然だけであつて、決してあなたのお心ではないことがはっきり分かつたとき、私はあらためて生きたいと思ひました……でも、もう間に合わなかつたのです。神さまは、自分自身に対しても、神に対しても真実で、しかもその苦しみのゆえに、などとなく聖殿の戸口までもおむいたことのある一人の女性をおそらくあわれにおぼしめして、すでに御自身の庇護のもとに置かれていたのです。」⁽³²⁾

フェリックスの情事をもたらした苦悩は、モルソーフ夫人にとつてたしかに致命的ではあつたが、彼女は、フィリップ・ベルトーが見ているように、「裏切られた女」⁽³³⁾として死ぬのではない。モルソーフ夫人は、「真実の感情とはもともと分割できないもの」⁽³⁴⁾であり、「ペトラルカのラウラのような存在は二度とこの世にある筈もない」⁽³⁵⁾ことを、さらにまた、「自分たちの胸の思いと、世間の人々と神とを同時に満足させようとする」⁽³⁶⁾試みなど、およそ実現を望み得ない狂気の沙汰であつて、要するに「天と地とは相容れないものであること」⁽³⁶⁾を、文字通り死を招いた苦しみの代償として、十分に思い知らされていた筈である。しかし、にもかかわらず彼女は、あらためてフェリックスとの精神的な愛に生きようと思つのである。だが、そのときはもはや遅かつたのである。

おそらくこの告白——「私はあらためて生きたいと思ひました……」というこの一節ほど、フェリックスとの魂の結びつきと、無限の愛への希求にかけた女性主人公の情熱の凄まじさを、感動的に示しているもの

はないであろう。一八三〇年代のバルザックが「美德の狂気沙汰」を主題にして書いた作品の主人公たち、たとえば『絶対の探求』のバルタザル・クラースや『知られざる傑作』のフレンホーフエルが、それぞれ化学における、あるいは絵画における絶対の探求者であるように、モルソーフ夫人がまさしく愛における絶対の探求者であることを、『谷間の百合』の結び近いこの一節にいたって痛切に実感させられるのである。

この悲壮なくだりが、宗教的なあいまいさという点において、重大な問題を提起していることも否定するわけにはいかない。一体モルソーフ夫人は、もしも死の淵からよみがえり得たとしたら、フェリックスとのあいだに、どんな精神的な愛のありようが許されると思つたのであろうか？ 考えられるのはただ一つ、かつて彼女が深い悔悟とともにフェリックスに語つたように、「自分、という気持が不幸と悲しみをひき起こす」のだから、「ちよど子供を愛するように、自分のためではなく、ひたすら相手のために愛する」⁽³⁷⁾ことである。しかし、これも彼女自身が同じ場面でフェリックスに述懐しているように、「夕方、散歩のときに、自分だけ子供たちや夫よりも先の方を歩きながら、彼らとはまったく関係のない思い出や考えにふけつたり、そうして歩き続けながら、心はほかの誰かに結びついていたりすれば、その足取りさえもきびしく償われなければならぬ」⁽³⁸⁾のではないのか。彼女はこの罪の意識にどのように耐えていこうと思つたのであろうか？ いや、むしろ、プラトニックな愛に固執する夫人には、所詮、思うことの罪の意識のきびしさが欠けていたのであつて、へあらためてフェリックスとの心の愛に生きたいと願つたが、ただ間に合わなかつただけである、とも読みとられるくだんの告白は、その罪に対する彼女の悔悟のなき、ないしはあいまいさを示している点で衝撃的であるともいえよう。

仮に、モルソー夫人の「肉の反抗の叫び」を病人のうわごととみなし得たとしても、フェリックスへの遺書は全面的に真実の思いを伝えてあるものと受け取らざるを得ない。モルソー夫人はバルザックによつて、これは「まだ生命力に満ちた、完全に意識の明瞭なときに書かれた」と注記されているばかりでなく、彼女はそれを、終生懺悔も終え、夫から赦しと祝福をも得たのちにフェリックスに手渡すからである。一体彼女は、何を懺悔し、何を夫に詫びたのか、という疑問すら抱かせられるであろう。フィリップ・ベルトーが、「たとえ思念の罪でも、神への愛と同じ心のなかに共存することは許されぬことを、作者は知るべきであつた」⁽⁴⁰⁾と批判しているゆえんである。

ここで思い起こされるのは、バルザックの世界の絶対の探求者たちが一様にあいまいさのうちに探求の生涯を閉じることである。バルタザル・クラースは「EUREKAI」と叫んで息絶えるが、彼のあの叫びは瀕死の病人の幻覚によるうわごとにはすぎないのか？ それとも彼は真実「絶対」を発見して、それを表明しようとしながら、もはや間に合わなかつただけなのか？ フレンホーフェル画伯が「知られざる傑作」を火中に投じて自らも命を絶つたのは、それが無に等しいことを思い知らされた絶望のあまりなのか？ それとも彼は、この知られてはならない傑作が他人の目にさらされたことを悲観して、今度こそは永遠にわがものにしてようとしたのか？ さらにルイ・ランベールの「狂気」は、恋人が語るように、彼がすでに肉体の羈絆から脱して天界に生きているあかしなのか？ それとも彼のスウェーデンボルグへの帰依自体が、過度の思考のために真正銘の狂気に向かう最初の変化を証拠立てているのか？

モルソー夫人の遺書が提起している宗教的なあいまいさの問題は、こうした探求者たちの結末のあいま

いさを単に思わせるだけではなく、まさにそれらに匹敵するものであろう。彼女の悔悟のあいまいさも美德の狂気沙汰ゆえの、いいかえれば、彼女が愛における絶対の探求者であるがゆえのものだからである。

しかし、問題の告白の後半によっても明らかであるように、このモルソー夫人すらもカトリック教の慈悲によって救済されるのである。ヘルトーが批判している通り、バルザックが思念の罪に対して無知であったとすれば、『谷間の百合』は彼の意図にもまみれて un livre catholique になりおちているともいい得るであらう。

〔注〕

- (1) Sainte-Beuve : Les Grands Ecrivains français, XIX^e siècle - Les Romanciers I, Garnier, pp. 195—196, Appendice, Extrait du t. I de 《Port Royal》
- (2) H. de Balzac : Lettres à Madame Hanska, éd. de Roger Pierrot, les Editions du Delta, t. I, p. 247.
- (3) Ibid., p. 291.
- (4) 一八三六年八月二十六日付《ルソーズ》宛手紙。H. de Balzac : Correspondance, éd. de R. Pierrot, Classiques Garnier, t. III, p. 131. バルザックはインスカ夫人宛の手紙（一八三〇年七月十三日〜八月二十二日付）でも、モルソー夫人は「この天使のような人」ヘルソー夫人の「色あせた版下絵」をすきなごとく述べた。Lettres à Madame Hanska, éd. cit., t. I, p. 439.
- (5) 一八三二年六月二十日付。Correspondance, éd. cit., t. II, p. 24.
- (6) Le Lys dans la vallée, La Comédie humaine, nouvelle éd. de la Pléiade, Gallimard, t. IX, p. 1159. 『谷間の百合』のナスタトにしろつては、本論稿ではすなわちこの版に拠っているのて、以後は

頁数だけを注記する。

(7) 一八三七年一月十五日付ハンスカ夫人宛の手紙を参照。 *Lettres à Madame Hanska*, éd. cit., t. I, p. 479.

(8) *Le Lys dans la vallée*, pp. 1213—1214.

(9) *Ibid.*, p. 1124.

(10) *Ain : Avec Balzac, Gallimard*, p. 24. 『谷間の百合』に関するアランの文章は、筆者にとって依

然として卓見に満ちたものであるが、この点のみ異見を抱く。たしかに、バルザックは政治を語るのにいちいち断わりはしない。しかし、果たして『谷間の百合』はまずなによりも社会的であるとまでいえるであろうか？ 国王が描かれているとはいっても、それはとりわけ男女の仲に通じた私人としてである。フェリックスが国王の特使としてモルソーフ家に迎え入れられるとはいえ、彼はその前に、「真の女王であるモルソーフ夫人に仕えるために、ガンの宮廷を去ろうと決心した」のである。さらにその折、最大のニュースはモルソーフ夫人が彼のために氷室を作らせていたことであって、「氷がありますよ」という夫人のひと言に、ワートルローの敗北にはじまる一連の政治上の大事件は、二人にとってすべて何事でもなくなる。フェリックスの好む十分に冷えた水は、彼がはじめて愛を告白した夜に飲みほす夫人の涙と同じく、アンドルの流れが明らかにそうであるように愛をあらわしているものであって、この挿話は、『谷間の百合』では政治が恋愛の至上性を際立たせる役割に甘んじていること、いいかえれば、政治的、社会的な状況が情熱の必然性に見事に利用されていることを、きわめて端的に、と同時に象徴的に物語っていると思われる。もっとも、アランの「有名な評言」は小説を軽蔑しているある外国人に述べられたものであって、そこに警句 (*bonade*) 的な要素があることも確かであろう。いずれにせよ、この問題についてはル・ヤウアンの次の見解に同意せざるを得ない。「バルザックはバンジャマン・コンスタンではない。彼の小説はフランスの社会と歴史に通じている……ただし、フランスの社会と歴史がフェリックス・ド・ヴァンドネス子爵の感情の歴史にかかわりきり限りにおびてゐる」。 *Moise Le Yaouanc : Introduction au Lys dans la vallée*, éd. de

M. Le Yaouanc, *Classiques Garnier*, p. LXXIX.

- (11) Le Lys dans la vallée, p. 1202.
- (12) Ibid., p. 1203.
- (13) Ibid., p. 1199.
- (14) 一八三六年八月二十二日付ハンスカ夫人宛手紙。Lettres à Madame Hanska, éd. cit., t. I, p. 439.
- (15) 一八四六年十月十一日付イポリット・カヌキーニ宛公開書簡。Lettre à M. Hippolite Castille, *Œuvres diverses*, éd. Conard, t. III, p. 648.
- (16) Le Lys dans la vallée, p. 1195.
- (17) Ibid., p. 1205. 参照。
- (18) Jean-Hervé Donnard : Introduction au Lys dans la vallée, nouvelle éd. de la Pléiade, Gallimard, t. IX, p. 912. 参照。この解説はカヌキーニ宛手紙など『谷間の百合』巻の終りにある。
- (19) Lettres à Madame Hanska, éd. cit., t. I, p. 310.
- (20) Le Lys dans la vallée, p. 1010.
- (21) この作品の種々のあらましやを扱った研究として、最近のものは Claude Lachet : *Thématique et Technique du Lys dans la Vallée de Balzac*, Nouvelles Editions Debrasse, Paris 1978 巻の終りにある。
- (22) Le Lys dans la vallée, p. 1747. Notes et variantes.
- (23) Ibid., pp. 1747—1748. Notes et variantes.
- (24) Ibid., p. 1748. Notes et variantes.
- (25) Philippe Bertault : Balzac, nouvelle édition, revue et augmentée, *Connaissance des Lettres*, Hatier, pp. 134—137. 参照。
- (26) Le Lys dans la vallée, p. 1202.
- (27) François Germain : H. de Balzac, *L'Enfant maudit*, édition critique établie avec introduction

et relevé des variantes par F. Germain, *Les Belles Lettres*, p. 106.

- (32) Ibid., p. 107.
- (32) Lettres à Madame Hanska, éd. cit., t. 1, p. 446.
- (33) Le Lys dans la vallée, p. 1146.
- (33) F. Germain : op. cit., p. 115. 未詳。
- (33) Le Lys dans la vallée, p. 1218.
- (33) Ph. Bertault : op. cit., p. 131.
- (34) Le Lys dans la vallée, p. 1036.
- (35) Ibid., p. 1035.
- (36) Ibid., p. 1168.
- (37) Ibid., p. 1168.
- (38) Ibid., p. 1169.
- (39) Ibid., p. 1219.
- (40) Ph. Bertault : op. cit., p. 134.